
Blue Blaze Eyes

進道 悠輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Blaze Eyes

【Nコード】

N4380A

【作者名】

進道 悠輝

【あらすじ】

全ては…禁断の魔術書から始まった。悪魔に呪われた少年の…壮大な物語。

Prologue

オレは……魔術をなめていた。

あの日、”禁断の魔術書”とまで言われた『アルバテル』に手を出した……

それも……遊び半分な気持ちで……

思えばあのときから、オレ”たち”は呪われていたのかもしれない。

母さんも……親父も……死んだ。

そして、弟は……

その日から……オレは一人になった。

第一章・Prelude

砂嵐の中を横断する、影があつた。

旅をするには不自然な小さな影。

「あぁっ！もう！」

砂漠の中心で、少年は歩き疲れたのか、突然叫び声を上げた。

「……見渡す限り砂漠砂漠っ！暑いし！喉は乾くしっ！もう最悪だ……」

少年は駄々をこねる子供のようにもがき始める。

首を左右に振ると共に、彼の特徴ある真紅の髪が揺れ動く。

「水……ッ！」

そのとき、彼の瞳に何かが映った。それは、まるで希望の光だった。

「オッ……オアシス……ッ！」

少年はすぐさま立ち上がり、目の前に見える水の宝庫へと足を進めた。

「よっし、屋気楼じゃない！本物だ」

砂漠を歩き始め、早三日。久し振りに触れる、冷たい水に思わず声を上げる。

「うおおっ！生き返る……！」

「ははっ。美味いだろ？坊主」

背後から聞こえた、男性の声に振り返ると、橙色の鰐広帽子を被った若い青年が立っていた。

「あんた……誰？」少年は睨みつけるように青年の顔を見た。とは言っても、警戒しているわけではなく、「坊主」と言われたのが気に食わなかったのだが。

要するに、彼は”子供扱いされる”のが嫌いなのだ。

「おやおや……そんなに怖い顔をするなよ。スタン君」

「なんで……オレの名前……？」

青年の言葉に、スタンと呼ばれた少年はキョトンとしている。

「さあ……なんでだろうね？そんなことより、街なら此処から南西に向かった先にあるよ。今のうちに水分を補給していくといい」

スタンは何故か親切な青年の言うとおりに、空になった筒の中に水を蓄えると、南西の方角へ向かった。

「ありがとな、オッサン」

スタンが青年に礼を言っていると、彼は不満そうに返す。

「おいおい、まだ26なんだがな」

「十分オッサンだろ」

「……うっ！」

しかし、それに対してもスタンは冷たく言い放ち、颯爽と駆けていった。

スタンは無事に街へたどり着くことができた。先程の青年のおかげだ。

（砂塵の街 リヴァル……か）

スタンが街の門をくぐり抜け、中へ入ると、曲がり角から一人の少女が急ぐように駆け寄ってきた。

「たっ、助けて！」

「へ？」

彼女はスタンの後ろに隠れるようにしゃがみ込んだ。

「てめえもソイツの仲間か！」

後からゾロゾロと現れた数人の集団にあっという間に周りを囲まれる。

「うわっ！何すんだ！！」

「黙れ！この泥棒風情が……！警察をなめるなッ……！」

「はあ！？」

突然のことに気が動転していたこともあってか、スタンもろとも彼女と一緒に牢へと閉じこめられた。

「どうしてくれんだよ……」

「……ゴメン」

横たわるスタンの隣でちょこんと座る彼女は、小さなつぶやくほどのか細い声で謝った。

「まあ、いいさ……無実だってわかりや出してくれるだろうしな」

スタンは背負っていた革のリュックを下ろすと、中からオアシスでもらった水を取り出し、先程から俯いたままの彼女に差し出す。

「……いいの？」

「ダメだったら差し出さねえよ……」

「……ありがとう」

「なんでだ？」

「えっ？」

スタンが語りかけた突然の言葉に、思わず聞き返すしかなかった。

「なんで、追われてたんだ……？」

「それは……」

再び、彼女はゆっくりと下を見たまま黙ってしまった。

「盗んだのか？」

「違う……！取り返した……だけ」

その言葉にスタンは溜め息を吐いてつぶやいた。

「だったら、そう言えばいいだろ？」

「言えなかった……怖くて」

スタンは彼女の言葉に対し、思わず立ち上がった。

「怖いだと……ッ！？お前は罪を犯してないだろッ……！」

スタンは何を思ったか、思わず彼女の胸倉を掴み、怒鳴りつける。

「お前に……」 本当の罪”を犯した人間の感じる恐怖がわかるのか
よっ……！！」

「……ッ……」

怯える彼女を見て、スタンはハッとして、つぶやく。

「悪い……でも、言ってるわかる相手じゃなさそうだな……」

「うん……」

「お前……大切なものを取り返そうとただけなんだろう？」

彼女はコクリと、小さく頷いた。

「じゃあ……逃げるか？」

第二章：capriccio

「逃げるって……どうやって？」

周りを見渡しても、堅く閉ざされた鉄の柱ばかり。どう考えても、人が抜け出せるスペースはない。

「こうするんだ！」

リュックの中に仕舞われていた分厚い一冊の本を取り出す。

本は青い光を放ち、独りでにページがめくられてゆく。

本のカバーには『The Key of Solomon』と書かれている。

辺りには風が吹き始め、スタンのコートがフワフワと舞い上がる。

（魔術書……！？ ソロモンの鍵……？）

そして、本を手に取るスタンの口が、ゆっくりと開かれる。

『神に似た者よ……ソロモンの名の下に具現せよ……』

大天使 ミカエル

牢の辺り一面が暖かく眩しい、金色の光に包まれてゆく。

光はスタンの右腕に集まり、徐々に形を作ってゆく。

細長く伸びた鋭い光を、スタンはその手で握りしめる。

光が薄れてゆくに つれて、金色のベールに覆われていたそれが、姿を現す。

（け……剣……？）

スタンの手に握られていた物は、鞘に収まった、長い剣。

ゆっくりと引き抜くと、鈍い銀色の鋭い刃に、金色の光が纏われ、妙な威圧感を醸し出している。

「……頼むぜ、カイル……」

スタンの身体は、剣のときとは全く違う、蒼く透き通るような光を纏う。

彼の瞳は、先程までの澄んだ黒ではなく、鮮やかな青に変わっている。

（……何、あの蒼い目……！？）

剣を手に舞を踊るかのような素早く、華麗な動きで、眼前の鉄の格子を一瞬にして斬り裂く。

「よし……逃げるぞ……！」

そう言ったスタンの瞳は、また漆黒の瞳に戻っていた。

「あっ、うん！」

思わず呆気にとられていた彼女も、スタンに手を引かれて走り出す。しかし、そう全てが簡単に行くわけもなかった。

「逃げるつもりか……？」

そこにいたのは、先程の警官だった。

「ああ……」

「逃がすわけないだろ……？」

ニヤリと警官は笑い、懐から銃を取り出した。重い輝きを放つ、黒いフォルムが一層恐怖を感じさせる。

すると、スタンは両手を上げて降参する素振りを見せる。

「ちょっと……！ほら、さっきみたいに魔術書で！」

「……無理、ミカエルとしか契約してねえんだよ」

「嘘……ッ……！」

「何をゴチャゴチャ言ってる？ 死ぬ準備はできたか？」

警官は引き金に手を掛ける。

「くそっ……！」

危機が迫った、その瞬間のことだった。

「……失せる」

一瞬、肌を感じた風圧とともに目を開けた瞬間、そこに銃口はなかった。

第三章：Symphony

「誰だ……？」

スタンの目に映ったのは、全身を覆うようなマントを背に纏った男。その手に握られた剣は鋭く光り、恐怖さえ感じさせる威圧感を放っている。

切り落とされた銃を確認すると、警備の男は悲鳴を上げて逃げ出していく。

「怪我はないか……」碧眼」

「なんで……オレの目のこと！」

男の口から発せられた言葉は、スタンを酷く驚かせた。

極力、他人には隠し通していた自分の瞳のことを会ったこともない男が知っているのだから。

「闇じゃ、お前は有名だ。魔術書の使い手でありながら、悪魔の目を持つてるのだから」

男の漆黒の髪は風に揺れる。扉の先から射し込む光に照らされて、輝いてるようにも見えた。

「ちよつと、話が読めないんだけど」

少女が頬を膨らませてつぶやいた。

「悪い！とりあえず、逃げるぞ」

呑気に話をしている場合ではない。

スタン達は急いでその場を立ち去った。

「で、自己紹介とか、しない？」

少女からの突然の言葉。沈黙の続いていた状態に耐えられなくなったのだらう。

「そういえば、みんな名前も知らないんだな……」

「そ。あたしはリオ・シャリウス」

少女は提案した自分から、とばかりに名乗り出した。

「オレはスタン・クリード。よろしく」

スタンもニツコリと笑って、自らの名を名乗った。

「僕は、ロイ・アズールだ。階級は闇騎兵軍、総指揮官」

「そっか。よろしくな。ロイ」

スタンは微笑みを浮かべると、早速とばかりに本題に移る。

「それより……目のこと。何でだ？」

スタンは先程とは打って変わって、真剣な表情になる。

「知ってる。確かお前の……」

「ハハ……そこまで知ってるのか。闇つてのは恐ろしいな」

スタンはロイの言葉に暗い表情を浮かべ、捨てるようにつぶやいた。

「そうだ。この目には……オレの弟が封じられてる」

「弟……」

リオは、切なそうに語るスタンを、見つめていた。

「両親は死んだんだっただか？」

「ああ」

スタンは力無く返答する。嫌な記憶が彼の頭で巡り続ける。

「始まりはお前が……魔術書に触れたことからか」

「そうだ……そうだよっ！！オレが殺したんだ……弟も、母さんも、親父も！」

スタンは涙を浮かべながら、それ以上は思い出したくない。とばかりに、強く怒鳴り散らした。

「自分ばかりを責めることはない。危険な魔術書を記した人間にも罪はある」

「そんな気休め……クソ！」

スタンは悔しさを堪えきれず、俯いたまま愚痴を零す。

「気休め……か。そうかもしれないな」

ロイは軽く笑って、スタンの肩を叩く。

「調度いい、君を案内しよう。闇へ」

「……闇、へ？」

第四章：Requiem

「そう、そしてーそこに君の求める全ての答えがある」

ロイに案内された場所は、なんでもない普通の教会だった。

意外と外装は新しく、汚れも見あたらない。そのため、壁が白く光っている。

「ここが……闇つてのオ！？　ただの教会じゃない！」

リオは納得がいかない、とばかりに愚痴をこぼし始める。

しかし、それに対してロイは説明を続けるだけ。

「ここが闇への入り口。全てを知るために中へ行こう」

ロイに連れられ、教会の裏へ回る。なんでも、表面上教会を運営しつつ、裏では闇の組織として活動しているらしい。

「ようこそ、スタンくん」

オレンジ色の鰐広帽子は、どこかで見た覚えがある。

「あ……砂漠のオッサン！」

彼はオアシスで出会った男性だった。

「あんときはありがとな。で……なんでオッサンがここに？」

スタンが首を傾げて訊ねると、男性は

「簡単なことだ。私が……闇の創立者だからだ」

「闇の……創立者」

「そう。そして君の求めるものはこの先にある」

彼が指差したのは、幾つかの扉のうち、一つだけの黒い扉。

「そこに……全てが」

スタンは、つかつかと歩き、扉に手をかける。

「スタン。これを持って行け。役に立つはずだ」

「ん？　わかった」

ロイはスタンに、自らの腰に納めていた剣を手渡した。

「リオちゃん……だったかな。君も行きなさい。君の求めるものも……そこにあるはずだ」

「……はい」

リオもスタンに続くように、ドアノブに手をかけた。

「そっぴやさ……リオ、お前が守ろうとしてた……大切なものって、なんだったんだ？」

「……ペンダント。お母さんの……最後のプレゼント」

リオは悲しそうに、俯いた。

「最後……か」

「うん。いつの日か、いなくなってた。私は、お父さんと二人で旅に出たって聞いてただけだね。それが、二人とも死んだって気づいたのはそれから五年も後。笑っちゃう」

「……そうか」

扉の向こうには、何もなかった。まさに、闇そのもの。

暗い空間で、近くに誰がいるのかもわからない。

「やだ……何これ」

「……闇」

徐々に紫色の光で辺りが照らされる。それと同時に、そこに佇む影をも映し出して行く。

「なんだ……アレ」

「まるで……悪魔」

そこにいたのは、漆黒の翼を生やした魔物。その経常は、何かで見た悪魔そのものだった。

「我は全てを司る者。お前たちのことも知っていた。我は世界を見た。蒼き瞳を通じて」

悪魔は重たそうに口を開く。

「蒼き瞳……オレの目のことか」

「その通り。なぜならば、あの日に貴様が開いた魔術書は、我のものだからな」

悪魔の言葉に、スタンは驚愕するしかなかった。

「そして、小娘。お前の両親も魔術書のために死んだ」

「え……!？」

リオは、瞳を大きくして、悪魔にすがりついた。

「何それ……どういうことっ!？」

「その日、スタンが開いた魔術書は事実上『アルバテル』ではないのだ。まして、今手にしている『ソロモンの鍵』も本物ではない」
悪魔は次々と彼らの知らなかった真実を語り始める。

「その二つは、小娘の父親が記した魔術書。『蒼焰の瞳』の一部だ」
「……お父さんが、魔術書を……？」

スタンもリオも、自分たちの知らないところで、そんな繋がりがあったことに驚くばかり。

「だからといって、なんでお父さんたちが死んだの!」

「魔術書の封印が解かれたからだ。だから、魔術書の関係者の命と引き換えに、我が生まれた。その少年の手によってな」

「……!？ オレのせい……なのか」

悪魔の言葉は、スタンの心に突き刺さった。

自分が魔術書に手を出したせいで、リオの両親は死んだ。
今まで感じていた罪悪感がより強くなっていく。

「いや……お前のせいではない。スタンよ……お前の瞳に命は今もある」

そう言われても、スタンはいまいちピンとこなかった。

キョトンとしているスタンに、悪魔は一言、囁くように言った。

「我を……殺せ」

「どういう意味だよ!」

スタンは悪魔の考えが理解できず、怒鳴り声で訊ねる。

「その瞳は我そのもの。貴様の弟の持つ精神力……そして、貴様と弟との繋がりを利用して碧眼を貴様に植え付けた」
スタンは冷静にその言葉を受け止めた。

「つまり……あなたが全ての命を司っている。そして」

あんたを殺せば、全てが元に戻る。

「そういうこと……だな？」

「その通りだ。殺せ。我はもう生きる必要はない。お前を通じて、十分に生きた」

スタンは隣で怯えるリオに優しく語りかける。

「戻そう。全てを、オレたちの手で」

「うん」

スタンはロイに渡された剣を構える。

リオはその手に自らの手を重ねた。

その刃は、悪魔の心臓を貫いた。

Epilogue

それから数年の時がたった。

「母さん！　重いよお……！」

幼い少年が、幾つかの紙袋を抱えて、母親に嘆いている。

「我慢しなさい、カイル。お兄ちゃんを見なさい！」

少年が母親に言われて、指の指す先を見れば、たくさんの食材を抱える兄、スタンの姿があった。

「いいよ。これぐらい平気だって！」

スタンは会話を聞くと母親のほうを向いて、ニツコリと笑った。

（オレの犯した罪の重さに比べたら……この野菜なんて、軽いもんだよ……）

アズール隊長、南西のB地点に、怪しい動きを見せる者がいるとの報告が」

鎧姿の男が、黒いマントの男のもとへと大急ぎで駆け込んだ。

「そうか……丁度いい。手が空いているし、僕が向かう。他の隊は君が指揮を取れ」

「はっ！」

（全く……あのオッサンの跡を継ぐのも楽じゃないな）

心中でそうつぶやいて、ロイはその場を後にした。

「また失敗！　お母さん、味付けわかんないよ！」

「またあ？　だいたい、何でそんな張り切ってつくるの？」

大好きな母親と楽しそうに、手作りのクッキーを焼くリオ。

「うん。あげたい人がいるんだ」

頬をほんのりと紅く染めて、リオはつぶやいた。

「へえ……」

満面の笑みでリオは続けて、母親にこう言った。

「そんでねっ。その人に……」

『ありがとう。』って言いたいのに！

そして時はまだ、ゆっくりと動いている。少しずつ、また少しずつ。

B
l
u
e

B
l
a
z
e

E
y
e
s

-

E
N
D

-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380a/>

Blue Blaze Eyes

2010年10月9日07時22分発行